

環境論的知の転回とその射程——「五つのリアクション」における近代批判の立体的構造——

東京農工大学 非常勤講師 上柿崇英

1. はじめに

環境の時代が開始した六〇年代から七〇年代において、環境の問題は多くの場合、“警告”という文脈から語られてきた。当時社会的に非常に大きな影響力を持ったいくつかの書物として、例えばカーソンの『沈黙の春』、メドウズらの『成長の限界』、エーリックの『人口爆弾』などが挙げられるが、それらはまさにそのような「警告の時代」を代表するものであった。しかし「警告の時代」は終わり、今日われわれが迎えているのは、むしろ危機が現実のものとなり、その危機に実際にどのように立ち向かうのかといった「適応の時代」である。たとえば、今日最もクローズアップされている問題のひとつである気候変動をめぐる議論の中心は、いまや数一〇年先の気候の変化と、それによってもたらされるもろもろの困難を前提として、社会のリスクを最小に抑えようとする試み、すなわち適応策 (adaptation) となっている (1)。

このような時代に必要となる“知”は、以上の文脈からいえば、確かに現実的な適応策を行うためのより精密な予測や、実現可能なグリーン・インフラやバイオエネルギーのための革新的技術 (グリーン・イノベーション) であったりするかもしれない。しかしこれらは、あくまで政策論的・技術論的な観点であり、本論で「環境論的知の転回」として問題にしたい観点は別のところにある。本論でいう「環境論的知の転回」とは、われわれが環境の時代を迎えたことを契機として立ち現れた、既存の“知”に対する問題提起であるといつてよい。われわれは急速に「適応の時代」を迎えたことで、「警鐘の時代」に行われた“知”への問題提起と、そこから派生したさまざまなアスペクトをかえって見逃しがちである。「警鐘の時代」の問題提起がもはや乗り越えられた過去の遺物であるとは必ずしも言えない。この問題提起は、「適応の時代」を迎えている今だからこそ、逆に重要な意味を持つのである。

実際、「警鐘の時代」に環境という契機がもたらしたのは、いくつかのラディカルな批判的精神の複合体であった。そして、その批判的精神はのちに“知”に対する五つの異なるリアクションとなって現れた。本論で着目したいのは、特にそれらのリアクションがそれぞれ異なる側面から近代批判を行っていた点である。つまり近代批判というキーワードを用いることで、われわれはそのリアクション全体を立体的な構造として理解することができるようになる。このことが意味するのは、環境という契機が喚起していた知の転回のコアが近代批判にあるにもかかわらず、その批判の構造がいくつかの射程に分離しているた

めに、このことが見えにくくなっている、ということでもあろう。

本論では、以上のような環境という契機がもたらした「五つのリアクション」と、その中心にある近代批判の構造を整理するところから始める。そしてそこから浮かび上がる諸論点について明らかにし、考察を試みたい。

2. 環境の契機と「五つのリアクション」

それではまず、環境という契機がもたらしたラディカルな批判的精神とは何だったのか、そしてそこから現れた「五つのリアクション」とは何だったのかについて、見ていきたい。

(1) 最初のインパクト

環境という時代の契機を語る上で必ず六〇年代から七〇年代が取り上げられるのは、この頃、冒頭でも示したようないくつかの重要な書物が発表され、それに触発される形で大衆運動としての環境主義が大きな存在感を現すようになったからであった。このときすでに大衆運動としては、反戦運動、反核運動、公民権運動などが展開されていたのだが、それらのエネルギーは環境主義に吸収され、大きな有機体を形成しつつあった [McCormick 1995]。

この環境主義という運動には、いくつかの特徴的な精神が含まれていた。そしてその精神は批判的な精神であった。それらをここでは、「人間中心主義批判」、「技術万能主義批判」、「物質主義・産業主義批判」、「進歩主義・文明批判」の四つに類型化してみたい。興味深いのは、それぞれの精神が、当時強烈なインパクトを持ったメタファーや書物に喚起される、単純だが象徴的なメッセージに体现されていた点である。この点を意識しながら、簡単に見てみよう。

第一に「人間中心主義批判」であるが、これは人間存在を生態系というより広い枠組みの中から捉え直し、そこから自然観・人間観を修正しようとする精神である。この背景には、19世紀末に確立した自然保護思想の伝統と、二〇世紀前半に確立した群衆生態学のもたらしたメタファーが深く関わっていた [上柿 二〇〇八]。このメタファーが環境危機に結びついたとき、人々はここから次のようなメッセージを受け取った。すなわち、環境問題の根源には、われわれが人間だけの利益ばかりを追い求め、依存しているはずの自然を人間のための道具と見なしてきたことが深くかかわっている、といったものである。そしてこのメッセージこそが「人間中心主義批判」の根幹をなしていたのであった。

第二に「技術万能主義批判」であるが、これは問題の克服に対する技術の潜在力を過信してきたという疑念の精神である。ここには一方で、人間の福祉を向上させるはずだった科学技術が逆に人間を破滅させる兵器をもたらした、という反核運動の精神が継承されていたのだが、他方では、自然界には存在しない人間が作り出した合成化学物質のもたらす

未知の脅威といった形でも人々に意識されていた。たとえばカーソンの『沈黙の春』は、周知のように DDT を含む農薬と生物濃縮の原理を関連づけ、その危険性を警鐘するものだった [Carson 1962]。ここでは、技術が生み出したものを技術で解決するサイクルには、常に未知の脅威が潜んでおり、そのような科学技術の逆説が問題にされていたのである。しかし人々がそこから受け取ったメッセージは、より単純な表現をする方が適切かもしれない。すなわち、安易な自然の改変を行ってきたわれわれは、いまに自然から恐ろしいしっぺ返しをくらう、といったものである。

第三に「物質主義・産業主義批判」であるが、これは物質的な富の量によって幸福や福祉を実現すること、またそれを支えてきた産業社会という社会様式に対する疑念の精神である。この精神については、メドウズらの『成長の限界』とシューマッハの『スモール・イズ・ビューティフル』が喚起するメッセージがわかりやすい。人々は一方で『成長の限界』から、人類全体が自然から享受できる物質的な富の量には限界があるにもかかわらず、その富の際限のない拡大を前提としてきたことへの自戒のメッセージを受け取った [Meadows, Meadows, Randers and Behrens III 1972]。また他方で『スモール・イズ・ビューティフル』から、現在の生き方や労働のあり方は、そのような富の生産のために制度化されてきたものであり、そこでは本来の生の豊かさ、生き方の質はむしろないがしろにされてきた、というメッセージを受け取った [Schumacher 1973]。これらのメッセージはこの精神を端的に示すものであったといえる。

第四に「進歩主義・文明批判」であるが、これは人類がより優れた未来、輝かしい未来に向かって常に前進しているという歴史観への疑念の精神であり、より徹底した場合には、現在の危機の原因が人類の作りだしてきた文明そのものにある、といった形をとった。この精神は終末論として古い伝統を持っていたが、特徴的だったのは、たとえばエーリックらが『人口爆弾』に描いた帰結のように、われわれの直面する究極問題に対して、ある種の強いリアリティが含まれていたということであった [Ehrlich 1968]。

ここでいう究極問題については、ハーディンの「救命艇の倫理」を引き合いに出すと分かりやすい。ハーディンは豊かで人口が安定し環境収容力に余力がある先進国を“救命艇”に、また貧しく爆発的に人口が増加し環境も悪化して行く途上国を“泥船”にたとえながら、“救命艇”に乗り移ろうとする“泥船の船員”を助けて共倒れになるよりも、移民の受け入れや援助を取り止め、いわば“泥船”の船員はそれ自身の環境収容力によって淘汰されるに任せるべきではないかと揶揄した。もちろんハーディンの意図はそれほど単純ではなかったのだが、人々が感じていたのは、われわれの文明がどこで足を踏み外したのか、近いうちに自分たちはこのような究極問題に直面し、その判断を実際に下さなければならないのではないか、という恐怖でもあったのである [ハーディン 一九七五] (2)。

以上、四つの精神についてみてきたが、ここで取り上げてきたメッセージがいずれも素朴で単純であることに注目したい。重要なのは、メッセージが時代の直感に合致した明快

さを持つからこそ、それは人々を突き動かす原動力となっていたということである。この批判的精神は実際には複雑に絡まりあい、いわば批判的精神の複合体をなしていた。そしてこれが、環境という契機がもたらした、最初のインパクトだったのである。そしてこのような最初のインパクトを受けて、批判的な精神はやがて知の問題と関連する「五つのリアクション」となって現れるようになった。すなわち「倫理学としてのリアクション」、「存在論としてのリアクション」、「分析手法としてのリアクション」、「社会批判としてのリアクション」、「実践論としてのリアクション」である。次に、それらについて見て行こう。

(2) 環境倫理学——倫理学としてのリアクション

まず「倫理学としてのリアクション」は、主に先の「人間中心主義批判」を拡張する形で形成されたパラダイムであった。すなわちこれまで人間の枠に閉じていた議論の枠組みを、動植物を含む自然物にまで拡張させ、それによって環境危機をもたらした根源的な領域を変革できないかと考えたのである。そしてこのリアクションの最大の特徴は、それを伝統的な倫理学の方法論を応用することによって成し遂げようとした点であった。つまり従来の倫理学を人間中心的なものとして位置づけ、非人間中心的な普遍的原則を倫理的に導出し、その普遍的原則の持つ言説の力を活用しようとしたのであった。

ここに含まれる議論として有名なのは、“自然物の当事者適格”という形で間接的に自然の権利を論じたストーンや [Stone 1972]、功利主義理論を拡張することで動物の権利を擁護したシンガー [Singer 1976]、生命体の持つ“それ自体の価値”を位置づけようとしたレーガン [Regan 1983] やロールストン三世 [Rolston III 1988]、生態系の秩序から演繹される強い全体論的な環境倫理を論じたキャリコットなどである [Callicott 1983]。そしてこれらの古典的な議論に、“持続可能な開発”概念に触発された世代間倫理などが絡み合い、いわゆる環境倫理学が形成されたのであった。

この取り組みは九〇年代初めまでは非常にセンセーショナルなものとして受け入れられていた。自然や環境の問題を倫理的に扱うことは、時代の要請である以上に、学問や時代の進歩の一局面ですらあるように思われた。たとえばナッシュは、権利を含む道徳的地位の対象が拡張されるプロセスを歴史の普遍性と捉え、かつて権利が、血縁や人種、性別の垣根を越えていったのと同じように、それが今まさに人間の垣根を越えつつあるのだと解釈した [Nash 1990]。

このように第一のリアクションは環境倫理学を生み出し、環境論的知のラディカリズムを牽引し続ける事になるように思われた。しかしながら、これらの普遍的な倫理原則を用いるという戦略は、九〇年代後半から下火になっていくことになる。

(3) ディープ・エコロジー——存在論としてのリアクション

次に「存在論としてのリアクション」であるが、ここには第一のリアクションと同じよ

うに「人間中心主義批判」の精神が強く働いていた。しかし第二のリアクションが決定的に異なっていたのは、問題となるパラダイム転換を、普遍的な倫理原則からではなく、新しい存在論から成し遂げようとした点であった。

このリアクションは通常ディープ・エコロジーと呼ばれ、その母体となったのはネスの思想である (3)。ネスの存在論の核心は、「関係的・全体的場 (relative-total field)」、「ゲシュタルト (Gestalt)」、「自己実現 (Self-realization)」(4) という三つのキーワードによって外観を語るができる。つまり、自己と他者、主観と客観は厳密には切り離して捉えられず、関係性とその複合的な網の目の脈絡を通じてしかとらえられないこと、またそのとき要素は、音素の構成する音楽、星が構成する星座のような全体的構造 (ゲシュタルト) を構成しており、人間だけでなく動植物や微生物、土壌などを含む生態系や生命圏が高次のゲシュタルトを構成していること、そしてより高次の全体性へ自己を結び付け、そこから自己の存在の意味を繰り返し位置づけ直していくプロセスを、自己実現と呼んだのである [Naess 1989]。

ここでこれらの枠組みが構築された背景を探ってみると、興味深いことに、ディープ・エコロジーには、実際には「人間中心主義批判」だけでなく、先の「四つの精神」がすべて含まれており、その意味で文字通り最もラディカルな環境主義であったということが確認できる。

たとえば、関係的・全体的場の視点は、われわれの行動の前提となる世界観を問題としているのであり、ここには技術や政策による“対処”ではない、より根本的な“治療”の方法を模索する問題意識が背景にある (技術万能論主義批判)。またたとえば自己実現という概念の真の意図は、彼の言う「大きい (big) ことと偉大である (great) ことの違い [Naess 1989:29=ネス 一九九七:五〇]」を、いわば理論的に説明することに他ならない。すなわち「人間以外の世界に対する人間の現在の干渉は度を越して [Naess 1989:29,=ネス 一九九七:五〇]」おり、われわれは人口を減らし、物質に基づく生活水準を下げなければならない (進歩主義・文明批判)。それにもかかわらず自然の中で動植物とふれあい、仲間と語り合い、健やかに労働しながら自然や他者との繋がりを日々感じて生きる方が、現在のライフスタイルよりも遙かに満ち足りて幸福である (物質主義・産業主義批判)。さらに一体性への理解のもとでは、環境に配慮した行動は苦痛にはならない。なぜなら自然や人間以外の生物がゲシュタルトを通じてつながり合う他者なら、“彼ら”の喜びは自分の喜びになるはずだからである、といった確信がこの背景にはある。

ディープ・エコロジーはそのラディカリズムによって、多くの草の根の実践を喚起した [Dowie 1995]。しかし他方でフォックスやノルマンのように存在論の局面が神秘主義的に誇張されて行った側面もあり [Fox 1990, Nollman 1990]、やはり九〇年代後半になると、その斬新さよりも心理主義的な欠点が目立つようになり、第一のリアクションと同じように下火になって行った。

(4) 社会—生態システム論と形而上学的・認識論的前提——分析手法としてのリアクション

次に第三の「分析手法としてのリアクション」であるが、ここではまず「人間中心主義批判」に触発される形で、既存の知の構造を組み替えた新しいパラダイムを見ることができると。たとえば典型的なものとしてエコロジー経済学をあげられるが、ここでは経済から自然を位置づけるのではなく、経済を生態系のサブシステムとして埋め込む独自の枠組みが提起された [Daly and Farley 2004]。

さらに注目できるのは、「社会—生態システム論」として括弧することのできる、複雑システム、適応システムといったシステム論的なアプローチを応用した一連の議論である。その特徴は社会システムと生態系を、相対的に自立し、共進化的相互作用を引き起こす複雑適応システムとみなすところであり、これは社会と自然の関係性を捉える、一つの新しいパラダイムであった (Berkes, Colding and Folke 2003, Marten 2001)。興味深いことに、ここには第二のリアクションに含まれていた認識論的問題意識が、知の構造の問題として別の形で提起できる観点も含まれていた。たとえばノーガードは、社会システムと生態系の相互作用について論じた上で、近代的な「形而上学的・認識論的前提 (metaphysical epistemological supposition)」は複雑システムの諸特徴とは相反する概念によって構成されており、それが社会や生態系を捉える際に誤解を引き起こし、持続可能でない社会を生み出してきた一つの要因になったと主張した。具体的には原子論、機械論、普遍主義、客観主義、(科学的)一元論ではなく、全体論、文脈主義、主観主義、多元論を採用した、ローカルな次元での知の構造の再編が必要であると提起したのである [Norgaard 1994]。

このパラダイムの優れた点は、漠然と語られてきた知と多様性の問題に対して、ローカルな次元で生じる知の蓄積とそこに含まれる多様性がシステム全体の適応力 (resilience) に強く貢献することを、社会システムと生態系の持つシステム論的なダイナミズムの中で説明したところであったといえる。ローカルな社会とローカルな生態系では長年にわたる相互作用 (共進化) によって積み上げられてきた、技術・方法論・文化・制度を含む知の体系があり、それは時に明文化されない暗黙知を含む形で社会に埋め込まれている。そしてそれは普遍性と一元的な統合を志向する近代的な知の構造とは異なる性質を持つのである。

(5) 社会的エコロジズム——社会批判としてのリアクション

次に、「社会批判としてのリアクション」を見ていこう。ここにはまず、環境的な改善を政策論的に求めていく政治的な運動が含まれている。この運動は当初、自然保護団体などによるロビー活動として展開されていたが、特に欧州での“緑の党”に見られるように、議会を通じた社会変革という形をとる場合もあった。

ただし知の問題としてより重要なのは、このリアクションには、政治的エコロジーとは別の次元で「物質主義批判・産業主義批判」の精神を社会構造論的な批判として新しく展開する、という側面があったという点である。たとえばエコ・フェミニズムの場合、資本主義的社会様式が家父長制と結び付き、自然に対する搾取・抑圧が同時に女性に対する搾取・抑圧の構造を生み出しているとした (5)。ここで特に注目できるのは、この自然と女性の問題を媒介するものとして“生産”に対する“再生産”を位置づけた点である。“再生産”というのは一方で「生命そのものの再生産 (生殖、繁殖)」を意味するが、他方で自然の領域においては生物多様性の保護を、人間の領域においては、生活に必要な食料や水、衣料、住居、燃料といった物的必要物だけでなく、家庭やコミュニティなどの社会的必要物をも意味する。ようするに、ここでは産業社会が重視してきた工業的な意味での“生産”に対し、それに脅かされてきた生命・生活を対置させることで、“再生産”を重視した社会様式への変革を提起しているのである [Merchant 1992]。

そしてこのリアクションのもうひとつの重要な論点は、ソーシャリズムとの関連性である。当初、環境運動と社会主義運動は対立する傾向があったが (6)、しだいに両者を接合させる言説が生まれてきた。たとえばペッパーは、環境運動が社会批判的な精神を含んでも、それを実現するための明確な変革理論を持っておらず、ソーシャリズムの持つ変革理論こそがその弱点を克服できると考えた [Pepper 1993]。このようなペッパーの枠組みはいわばエコロジズムの問題意識をソーシャリズムに吸収するものであったが、実際にはソーシャリズムの枠組みを変形させたさまざまな議論がもたらされた (7)。とはいえそこに共通していたのは、資本主義社会の変革こそが環境危機の克服の根底的な契機であり、社会主義化のプロセスこそが社会的公正と同時に、人間と自然を含む公正を具現化するという問題意識であった。

(6) 環境プラグマティズム——実践論としてのリアクション

最後に「実践論としてのリアクション」であるが、この問題意識は以上の中ではもっとも新しいものといえるかもしれない。そしてここでの主眼は、知の構造や枠組みを問題にすることではなく、知を扱う研究者の営為そのものを問題とすることであった。

そもそも、このリアクションが出てきた背景には、先の「倫理学としてのリアクション」や「存在論としてのリアクション」が勢いを失う中で、特に前者に対する強い批判が込められていた。つまり、環境倫理学はラディカルな問題提起を行ってはいきったものの、たとえば人間以外の生命や生態系がいかなる根拠でそれ自身の価値を持ちうるかといった議論は、現実の問題解決には結局何も貢献できなかつた、という反省である [Light and Katz 1996]。このアプローチは「環境プラグマティズム (Environmental Pragmatism)」と呼ばれるが、ここではこのような従来の“人間対自然”の対抗軸、価値をめぐる“基礎付け主義”などにかわって、現場の具体性を帯びた問題を通じて環境倫理を語ろうとすることが目指され

た (8)。

ここで特に注目したいのは、このアプローチが哲学・倫理学者の“専門的技能”に着目している点である。ただし専門的技能といっても、それは文献学的な知識ではなく、哲学者・倫理学者が得意とする概念化・理論化の技能、別の言い方をすれば、複雑かつ断片的に議論されているテーマや事象を理論的に構造化し、言語的に記述して行く能力のことである。確かに具体的な現場や個別的な事象を実証分析する際には、哲学・倫理学者はそれを得意としてきた別の学問に及ばないかもしれない (9)。しかし現場で生じる複雑なコンフリクトや動的な変化を捉えるためには、この“言語化”というプロセスが非常に重要な意味を持つのであり、哲学・倫理学はこの局面において特別の役割を担いうるというわけである [吉永 二〇〇八]。

3 環境論的転回における近代批判の立体的構造

(1) 近代批判のまなざしへ

前節では、環境の契機がもたらした最初のインパクトであった批判的精神と、そこから展開された環境論的知の問題に関連する「五つのリアクション」についてみてきた。ここからわかることを簡単に整理しておこう。

まず確認する必要があるのは、四つの批判的精神のうち、「人間中心主義批判」こそ、多くのリアクションを引き起こす原動力となってきたことである。たとえば「倫理学としてのリアクション」は、それを普遍的倫理原則によって展開し、「存在論としてのリアクション」は、それを新しい存在論によって展開しようとした。さらに「分析手法としてのリアクション」は、それを複合的なシステム論へと展開させたのであり、「実践論としてのリアクション」は、先の普遍的倫理原則によるアプローチの批判として登場したのであった。「社会批判としてのリアクション」は、その意味では最もこの精神が薄いものであったが、エコ・ソーシャリズムやエコ・フェミニズムに見るように、そのモチーフを既存の社会理論に吸収する形で展開された。

次に、四つの精神をもっとも強く引き継いでいたのは「存在論としてのリアクション」であったことも重要である。この精神には先にみたように、最初のインパクトに含まれていた批判的精神がすべて内在しており、その意味で環境主義を徹底的に先鋭化させるものであった。とはいえこの四つの精神は、多かれ少なかれすべてのリアクションに継承されていたともいえる。たとえば「技術万能主義批判」は、これらの多くの議論が主流の改良主義的な技術論的アプローチでは乗り越えられない、何らかの本質的な転換を強く希求してきたひとつの根拠として、常に根底に流れていた。また「物質主義・産業主義批判」は、そこへ至る方法は異なるが、来るべき社会のひとつのイメージとして常に根底にあり、「進

歩主義・文明批判」についても、これらのリアクションを支える原動力となり続けてきたのである (10)。

最後に確認しておきたいのは、「倫理学としてのリアクション」と「存在論としてのリアクション」がそれぞれ勢いを失い、その中から「実践論としてのリアクション」が現れたという事実である。このことが意味するのは、「倫理学としてのリアクション」も、またもつとも批判的精神を先鋭化させたはずの「存在論としてのリアクション」も、時代の要求に必ずしも十分に応えられてこなかったという側面を示している。そしてこのことは、冒頭で述べたように、問題が現前化し「適応の時代」を迎えるようになった今日、再び効果の見えやすい産業技術論に議論が収斂しがちな事態と関連づけて理解する必要があるだろう。

以上を踏まえて本節で着目したい問いは、最初のインパクトに含まれていた批判的精神の本質はどこにあり、また「五つのリアクション」を媒介として、それがどのような形で今日の事態にまで継承されているのか、というものである。結論的に述べるなら、批判的精神の本質は近代批判にあったこと、そして「五つのリアクション」が、それぞれ異なる角度からの近代批判を展開しているにもかかわらず、その近代批判が断片化され、複数の矛盾を含んでいたことがここでは焦点となる。それではこの点についてみていこう。

(2) 「五つのリアクション」と断片化された近代批判

まずわれわれが先に類型化した、「人間中心主義批判」、「技術万能主義批判」、「物質主義・産業主義批判」、「進歩主義・文明批判」という批判的精神には、いずれも近代批判がその中心にあることを確認しよう。ここで近代 (modernity) というのは、前提とされていた概念や価値観といったイデオロギー的局面、すなわち近代的世界像のみならず、そのもとで構築されてきた社会モデル、すなわち近代的社会様式を含む全体を意味している (11)。端的にいえば、「人間中心主義批判」と「進歩主義・文明批判」は近代批判のうち、主に近代的世界像に対する問題提起の側面であり、「物質主義・産業主義批判」は近代批判のうち、主に近代的社会様式に対する問題提起の側面である。そして「技術万能主義批判」は、近代批判の中でも、主にそのような近代のダイナミズムが採用してきた問題解決の手法に対する問題提起の側面なのである。

このように考えていくと、まず「倫理学としてのリアクション」は、これまで人間の枠の中で行うことが前提とされてきた価値や権利の問題を、生命や生態系などに拡張しようとしたという点で、極めて近代批判的であったといえる。しかし必ずしもそうとはいえないのは、元来環境倫理学が、この人間中心主義からの脱却を近代倫理学の概念体系・手法によって試みようとしてきたからであり、その意味では非常に近代的だったともいえるからである。前述のナッシュが示したように、環境倫理学の多くの言説は、道徳的範疇の段階的拡張というプロセスの延長線上に位置するものとして描くこともできる。その意味で

は、進歩主義という極めて近代的な世界観とも強い親和性を持っているのである。

第二に、「存在論としてのリアクション」は、やはり近代批判がその中心にある。こちらの場合、特に問題となったのは、主観と客観、主体と客体といった近代的区分であり、ここでは存在の起点を、個体主義から生命や生態系を含む高次の全体性に位置付けることが試みられた。注目したいのは、ここでネス自身が自己実現には人それぞれの方法があり、ディープ・エコロジーそのものも多様性を含んだ運動体であると考えているところである(12)。つまり、原則としてこのリアクションは主体概念だけでなく普遍主義をも拒否するのである。とはいえ、先にも触れたようにこのアプローチは心理主義的であり、その意味では近代批判が限定されてしまっていた。ディープ・エコロジーの主張者たちは多かれ少なかれ、それぞれが自己存在をゲシュタルト的な全体に統合させていくことで、人はおのずと人間以外の存在に対する道具的価値以上の価値を認め、また脱物質主義的ライフスタイルを選択するようになり、それに連動して社会構造も変わっていくだろうと考えていた。つまりここでは、近代的な社会様式に対する批判の潜在力が、存在論の陰にむしろ後退してしまっているのである。

第三に、「分析手法としてのリアクション」であるが、ここでの議論もまた中心にあるのは近代批判であった。この場合、議論の鍵となるのは複雑適応系の概念であったが、ここでは社会と自然の関係のみならず、社会システムと生態系のダイナミズムを分析する際、近代的分析手法が前提としていた「形而上学的・認識論的前提」の限界を指摘することに重要な意味があったのである。ただしこの近代批判は、あくまでシステム論を媒介とした分析手法に重点がおかれており、やはり総合的な近代批判を行うには力不足を認めない。

第四に、「社会批判としてのリアクション」であるが、このリアクションも同様に、物質主義的な産業社会を批判し、それを支えている社会構造を変革しようとする点において、やはり強い近代批判を持っているといえるだろう。しかしながら、たとえば政治的エコロジーは政策を通じた変革を志向するために、逆説的に昨今の「エコロジー的近代化(ecological modernization)」、すなわちグリーンイノベーションとエコ産業化の総合的なアプローチに親和性を持ってしまい、このことが近代批判への眼差しを打ち消す結果となっている(13)。さらに、エコ・ソーシャリズムやエコ・フェミニズムの場合、社会変革のプログラムを従来の社会理論に求めたため、このことがアソシエーションリズムや進歩主義といった近代的なパラダイムに依拠するという逆説を含んでいる。別の言い方をすれば、ここでは環境倫理学が行ったように、近代の問題を近代の枠組みによって乗り越えるという志向性が含まれているのである。

最後に、「実践論としてのリアクション」の場合、確かに一見すると近代批判とは何の接点もないように見えるかもしれない。前述のように、このリアクションの発端は「倫理学としてのリアクション」に対する強い批判があった。しかしその批判の根幹にあったのは、環境という知の転回に関わる契機を、普遍的倫理原則の導出によってなそうとした、その

手法にあったのである。環境という契機の特徴が必然的に具体的な問題と結びついている以上、哲学・倫理という学問が果たすべきやり方は必ずしも普遍的な原則を導出することではなく、“言語化”を含むその“専門的技能”を異なる形で生かせるのではないか、という問題提起がここには含まれていた。つまりここでは、これまで哲学・倫理という学問が常に志向してきた普遍主義、あるいは矛盾のない知の統合といった、近代的な学問の特性を批判しているのである。とはいえ、具体性を志向することは諸刃の剣であり、政策論のレベルには一定の寄与ができて、批判的な知の潜在力を文化的な底力として蓄積していくことはかえって難しくなる場合がある。いうまでもなく、問題は時に、抽象的に扱って初めてその本質を問題にすることができるようになるからである。

以上のように考えていくと、「五つのリアクション」の批判的視座が、近代批判という対抗軸を通じてより立体的に理解できるようになるだろう。重要な点は、「五つのリアクション」は、確かに当初の近代批判の精神を受け継いでいるものの、それぞれがまったく異なる近代批判の局面に特化してきたということである。別の言い方をすると、環境論的な近代批判は、いくつかの射程に分離してしまっているのである。

この帰結は、二つの点で重要な意味を持っている。第一に、この近代批判の“断片化”は、当初の環境論的な知の問題提起から、批判的潜在力を後退させる一因となってきた。繰り返し述べてきたように、われわれは今日、問題が実際に現実のものとなり、それに向き合わざるをえない「適応の時代」を迎えている。具体的な問題解決の重要性がこれまで以上に高まっており、今後ますますこの傾向は強くなるだろう。そのような中、われわれはそれを依然として技術論を軸においた政策論の範疇でしか対応できずにいると言って良い。要するに、“断片化”によって脆弱になった批判的知は、ここへきてますます立ち位置を見出しにくくなっているのである。

もう一つの重要な帰結は、それぞれのリアクションがある局面からの近代批判に特化してきたことから浮かび上がる矛盾の中に、環境論的知の転回をめぐる、かなり本質的な論点が含まれているということである。次にこの点について考えてみよう。

(3) 「大きな物語」と「小さな物語」

「五つのリアクション」を近代批判の対抗軸で立体的に見た場合、そこに含まれている最大の矛盾は、抽象的で普遍主義的な志向性と、具体的で多元主義的な志向性が混在している点である。これまで見てきたように、多くのリアクションは基本的な方向性として、近代の特徴である普遍主義的かつ進歩主義的な枠組みから、多元主義的かつ文脈主義的な局面を重視する枠組みへと知を転回させてきた。これは環境という契機が、問題解決という観点から切り離せないという特性に由来するだけでなく、同時に複雑適応システムである自然生態系の諸特徴を反映せざるをえないところに由来している。しかし同時に、常にそれに反する抽象的で普遍的な志向性が現れるのは、問題を乗り越えた先にある社会や人

間の長期にわたるビジョンを、われわれが同時に必要としているからに他ならない。別の言い方をするなら、われわれは個別的な問題解決に目を向けるために多元主義を採用しなくてはならないが、同時に大きな転換が必要であることを認識している。そして大きな転換のためには個別的な積み上げではない抽象的なビジョンが必要であるが、それは決定論的な意味での普遍主義になってはならないのである。このジレンマこそ、環境論的知の転回において帰着する、最も本質的な矛盾であった。

この問題は、いわゆるポストモダンをめぐる問題に興味深い類似性を持っている (14)。かつてリオタールは、近代的な知の構造としての「大きな物語 (grand theory)」は終焉したと語り、この頃、イデオロギ的の体系主義から、知をめぐる文脈主義化、脱構築化を進める運動が起こった [リオタール 一九八六]。そして他方でその帰結が知の分散化を引き起こし、知の相対主義的でアノミ的な状況を生み出したという批判が起こった。これは知の構造をめぐる「大きな物語」と、いわば「小さな物語」の間に生じた矛盾であった。このように考えると、環境論的知をめぐる矛盾は、長期的かつ抽象的なビジョンとしての「大きな物語」と、多元主義的で文脈主義的な知の構造としての「小さな物語」をいかに両立していくか、という問題に置き換えることができるのがわかるだろう。

この問題のひとつの解決方法は、一方で具体的で、文脈依存的で、ローカルで、多元主義的な「小さな物語」を重視しながらも、同時に近代的な意味とは異なる〈普遍主義〉を認める、ということである。「小さな物語」の集積では「大きな物語」は発生しない。そして「大きな物語」のダイナミズムが存在しない状況は、批判的知の潜在力が枯渇する事態であるといつてよい。したがって、「大きな物語」は必要である。しかしそれが悪しき普遍主義にならないためには、複数の「大きな物語」が並立し、常に入れ替わり、新しい物語が生まれるダイナミズムを保持していること、またそれが個別具体的な「小さな物語」としっかり相互作用の糸で結ばれていることが条件となる。ここで必要とされる「大きな物語」は、暫定的なく〈普遍主義〉であり、将来的に打ち壊され、よりすぐれたビジョンに置き換えられていくことを前提とした体系的な理論、つまり文字通り“物語”として理解されるのである (15)。

4 まとめにかえて

本論ではこれまで、「環境論的知の転回」として、環境の契機が“知”にもたらした批判的精神や問題意識を振り返りながら、それを継承した「五つのリアクション」について述べてきた。特に環境論的な批判精神の中心には、近代へのラディカルな問題提起があったのであり、「警鐘の時代」以来、ここには批判的知の強い潜在力があつたのである。確かに「五つのリアクション」は、その近代批判を単なるメッセージの次元に解消するのではなく、それぞれのやり方を通じて、それを一定の理論や方法論という形で発展させてきた。

しかしそこでは近代批判そのものが“断片化”されてしまったために、かえって世界像や社会様式を含む総体としての近代全体に対する批判的潜在力は、減退することになってしまったのであった。

そしてわれわれは先に、この転回のもう一つの帰結として、「小さな物語」と「大きな物語」の新しい接合様式が求められている、ということについても確認してきた。環境論的知は、一方で具体的で、文脈依存的で、ローカルで、多元主義的な知の構造を求めつつ、同時に暫定的なく普遍主義に立つ、抽象的だが長期的なビジョンとなりうる理論的アプローチを必要としているのである。前者の局面においては、われわれは「実践論としてのリアクション」が強調したように、哲学・倫理を扱う一人の“専門的技術者”として、現場で形成される知の運動とその成果を引き受けていく必要があるのかもしれない。しかし後者の局面においては、知の分断と批判的精神の減退を防衛し、抽象的な理論枠組みからでしか語れない問題提起を行っていく必要があるのである。特に、「五つのリアクション」において断片化してしまった近代批判の射程を再び統合させる試みと同時に、環境論的な知の基点に近代批判を再び復権させることが求められているといえる。すなわち「警鐘の時代」から「適応の時代」への収斂に甘んずることなく、その先にある「超克の時代」への橋渡しを繰り返し模索し、試み続けることが、「警鐘の時代」を真に引き受け、「環境論的な知の転回」を完結させるための道標なのである。

〔注〕

(1) 内閣府総合科学技術会議「気候変動適応型社会の実現に向けた技術開発の方向性立案のためのタクスフォース」における資料を参照 (<http://www8.cao.go.jp/cstp/sonota/kikoutf/kikou.html>)。

(2) ここでのハーディンの意図には、たとえば環境収容力の限界の中で人類が本当に共同体としての倫理（宇宙船倫理）を機能させていくためには、世界政府の樹立が必要であるということを提起する側面も含まれていた。

(3) ネスはしばしば「生命圏平等主義 (biospherical egalitarianism)」という言葉から連想するような (Naess 1989)、生態系中心の全体主義的な環境倫理の提唱者であると誤解される。彼は確かに倫理を問題にしてはいるが、これは普遍的な倫理原則ではなく、むしろわれわれの他者や自然への心構えや向き合い方といった方が適切である。あくまで彼が問題にしたいのは、その向き合い方の前提となる存在論である。

(4) 自己と全体性との一体化を目指す自己実現 (Self-realization) は、ここでは個人的な目標の達成である自己実現 (self-realization) と明確に区別される。

(5) より正確に述べると、エコ・フェミニズムには大きく二つの潮流があり、本論がもっぱら念頭においている社会変革志向のソーシャリスト・エコ・フェミニズムとは別に、男性原理から女性原理への転換を主張する、どちらかというディープ・エコロジーと結び

つくカルチュラル・エコ・フェミニズムが存在する [丸山 二〇〇六]。

(6) 当初“緑側”からすると、“赤側”は依然として科学主義的な産業主義の範疇にとどまっているように見えたし、逆に“赤側”からすると、“緑側”は階級闘争から目を背ける上部構造のイデオロギーであるように見えた。

(7) 例えばオコンナーは、資本主義の変革をめぐる闘争を、労働者階級による社会主義運動ではなく、環境運動である（これが潜在的に社会主義的社会主義的形態をもたらす）とする階級理論の修正を行っている [O'Connor 1988]。

(8) 白水は、環境プラグマティズムの諸特徴を、道徳的多元主義、現実主義・文脈主義、反基礎づけ主義、自然／人間二元論の否定、民主主義の重視、という五点に整理している。 [白水 二〇〇四]。また後述の哲学・倫理学者の“専門的技能”という視点は、この“民主主義の重視”という観点に密接に関わっている。

(9) 端的には、現場主義や実証分析は、社会学を含む社会科学の得意分野であり、哲学・倫理学者が同じ土俵に参入しても、成果は中途半端なものにしかない。したがっていかにして異なる土俵のもとで、つまり社会学者とは異なる専門性の潜在力を用いて知的協働が図れるのかが、ここでの勝負所となる。

(10) ただし厳密にいうと、「実践論からのリアクション」は、政策論との親和性を持ち、必ずしも「技術万能主義批判」をほかのリアクションと同じように共有していなかったり、「社会批判としてのリアクション」は、社会発展論の側面を持つために、「進歩主義・文明批判」を共有できなかったりと、いくつかの矛盾がある。より本質的な矛盾については、後述する。

(11) 具体的には、先にノーガードが指摘した原子論、機械論、普遍主義、客観主義、科学的一元論といった「形而上学的・認識論的前提」だけでなく、主体や個人の自律といった概念、進歩・民主主義・経済成長といった価値の総体が近代的世界像を構築しており、国民国家と市場経済の複合的で高度な社会システムだけでなく、その産業社会的局面、そしてそれを支える個人として切り離された人間存在の様式の総体が、近代的社会様式を構築している。

(12) たとえばネスが自身の方法論を“エコソフィーT”と呼んでいるのは、自己実現には人それぞれの方法論があり、“エコソフィーA”や“エコソフィーB”が存在しうる、ということを示すためである [Naess 1989]。

(13) エコロジー的近代化論は、今日にわかに進行しつつある技術的革新を基礎におくエコ産業化のプロセスを新しい産業革命として位置づけるひとつの社会発展論である [Mol 2001]。エコ産業化は持続可能な社会には不可欠なプロセスではあるが、この歴史観に依拠すると、その楽観主義的特性によって、より長期的な批判軸を失うことになる。

(14) 今回は詳しく言及できないが、環境主義とポストモダンの関連性を指摘した論者として、ゲイ [Gare 1995] がいる。また布施は、ゲイの議論を踏まえつつ、ここでの問題を

物語論に接合させようと試み、後述の「大きな物語」と「小さな物語」をめぐる興味深い議論を展開している [布施 二〇〇九年]。

(15) ポストモダンの総括についてはさまざまな局面からの議論が必要であろうが、少なくとも類似の構造を持った環境という知の契機に関しては、このように位置づけることができるのではないだろうか。

[文献一覧]

上柿崇英『近代批判の環境思想』博士論文 (東京農工大学)、二〇〇八年

白水土郎「環境プラグマティズムと新たな環境倫理学の使命」『岩波 応用倫理学講義 2—環境』越智貢／川本 隆史／中岡成文／金井淑子／高橋久一郎編、岩波書店、二〇〇四年
G・ハーディン『地球に生きる倫理——宇宙船ビーグル号の旅から』松井卷之助訳、佑学社、一九七五年

布施元「環境問題の解決のための『物語』に関する考察——共生の視点を契機として」『共生社会システム研究』第3号、農林統計出版、二〇〇九年

丸山正次『環境政治理論』風行社、二〇〇六年

吉永明弘『『環境倫理学』から『環境保全の公共哲学へ』』『公共研究 (第5巻第2号)』千葉大学公共研究センター、二〇〇八年

F・リオタール『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』小林康夫訳、水声社、一九八六年

Callicott, B. John, “Animal Liberation: A Triangular Affair”, in *Ethics and the Environment*, Scherer, Donald and Attig, Thomas(eds). Prentice-Hall Inc, 1983 (J・B・キャリコット「動物解放論——三極対立構造」『環境思想の系譜3：環境思想の多様な展開』小原秀雄監修、千葉香代子訳、東海大学出版会、一九九五年)

Berkes, Fikret, Colding, Johan and Folke, Carl(eds), *Navigating Social-Ecological Systems*, Cambridge University Press, 2003

Carson, Rachel, *Silent Spring*, Houghton Mifflin, 1962 (R・カーソン『沈黙の春』青木築一訳、新潮文庫、一九七四年)

Daly, E. Herman and Farley, Joshua, *Ecological Economics*, Island Press, 2004

Dowie, Mark, *Losing Ground: American Environmentalism at the Close of the twentieth Century*, Massachusetts Institute of Technology, 1995 (M・ダウイ『草の根環境主義』戸田清訳、日本経済評論社、一九九八年)

Ehrlick, Paul, *The Population Bomb*, A Sierra Club-Ballantine Book, 1968 (P・エーリック『人口爆弾』宮川毅訳、河出書房新社、一九七四年)

Fox, Warwick, *Toward a Transpersonal Ecology*, Shambhala Publication Inc, 1990 (W・フォック『トランス・パーソナル・エコロジー』星川淳訳、平凡社、一九九四年)

- Gare, E. Arran, *Postmodernism and the Environmental Crisis*, Routledge, 1995
- Light, Andrew and Katz, Eric, *Environmental Pragmatism*, Routledge, 1996
- Marten, G. Gerald, *Human Ecology*, Earthscan Publication Ltd, 2001 (G・G・マーティン 『ヒューマン・エコロジー入門』 天野明弘監訳他訳、有斐閣、二〇〇五年)
- McCormick, John, *The Global Environmental Movement(2ed)*, John Wiley & Sons Ltd, 1995 (J・マコーミック 『地球環境運動全史』 石弘之／山口裕司訳、岩波書店、一九九八年)
- Meadows, H. Donella, Meadows, L. Dennis, Randers, Jørgen and Behrens III, W. William, *The Limit to Growth*, Universe Books, 1972 (D・H・メドウズ／D・L・メドウズ／J・ラーンダス／W・W・ベアランズ三世 『成長の限界—ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』 大来佐武朗監訳、ダイヤモンド社、一九七二年)
- Merchant, Carolyn, *Radical Ecology: the Search for a Livable World*, Routledge, 1992 (C・マーチャント 『ラディカル・エコロジー』 河本隆／須藤自由児／水谷広訳、産業図書、一九九四年)
- Mol, P. J. Arthur, *Globalization and Environmental Reform: The Ecological Modernization of the Global Economy*, MIT Press, 2001
- Nash, F. Roderick, *The Rights of Nature: A History of Environmental Ethics*, The University of Wisconsin Press, 1989 (ロデリック・F・ナッシュ 『自然の権利——環境倫理の文明史』 松野弘訳、ちくま学芸文庫、一九九九年)
- Naess, Arne, *Ecology, Community and Lifestyle*, Cambridge University Press, 1989 (A・ネス 『ディープ・エコロジーとは何か』 斉藤直輔／開龍美訳、文化書房博文社、一九九七年)。
- Norgaard, B. Richard, *Development Betrayed*, New York: Routledge, 1994 (R・B・ノーガード 『裏切られた発展』 竹内憲司訳、勁草書房、二〇〇三年)
- Nollman, Jim, *Spiritual Ecology: A Guide to Reconnecting with Nature*, Bantam Books, 1990 (J・ノルマン 『地球は人間のものではない』 星川淳訳、晶文社、一九九二年)
- O'Connor, James, "A Theoretical Introduction", in *Capitalism, Nature, Socialism*, vol.1, pp.11-38, 1988
- Pepper, David, *Eco-Socialism: from Deep Ecology to Social Justice*, Routledge, 1993 (D・ペパー 『生態社会主義』 小倉武一訳、農文協、一九九六年)
- Regan, Tom, *The Case for Animal Rights*, University of California press, 1983 (小原秀雄監修 『環境思想の系譜3：環境思想の多様な展開』 東海大学出版会、一九九五年、に第九章の部分訳あり)
- Rolston III, Holmes, *Environmental Ethics: Duties to and Values in the Natural World*, Temple University Press, 1988
- Schumacher, F. Ernst, *Small is Beautiful*, Harper & Row Ltd, 1973. (E・F・シューマッ

上柿崇英 (2010b) 『唯物論研究年誌』 青木書店 15 号 pp. 105-129 掲載

ハ 『スモール・イズ・ビューティフル』 小島慶三／酒井懋訳、講談社学術文庫、一九八六年)

Singer, Peter, *Animal Liberation*, Jonathan Cape Ltd, 1976

Stone, D. Christopher, "Should Tree Have Standing?: Toward Legal Rights for Natural Objects", in *Southern California Law Review*, Vol.45:450, 1972 (C・ストーン「樹木の当事者適格——自然物の法的権利について」岡寄修／山田敏雄訳、『現代思想』18-11 号、青土社、一九九〇年)